

一、次の話を読みながら、「かつこ」内の助詞や接続詞の正しいと思われる方に丸をつけなさい。

## 『高瀬舟』 森鷗外

たかせぶね　は　きょうと  
高瀬舟　へ　京都の高瀬川　は　じょうげ　こぶね  
を　を　上下する小舟である。とく  
川時代　へ　京都の罪人が遠島を申し渡される　と　ほんにん  
に　もう　わた  
しんるい　ろうやしき　えんとう  
の親類が牢屋敷　へ　よ　だ  
を許された。そこで暇乞をすること  
を許された。それから罪人は高瀬舟　に　は　せられて、おおさか  
まわ　まわ  
へ廻されること　で　あつた。それを護送するの　は　ごそう  
都町奉行の配下にいる同心で、この同心は罪人　の　に　親類の  
はいか　どうしん  
中で、主立つた一人　で　大阪まで同船させることを許す慣  
れい　おもだ　どうせん  
例であつた。これは上へ通つた事ではない　が　ゆる  
大目　に　見るのであつた、黙許であつた。  
おおめ　が　もつきよ  
とうじ  
当時遠島を申し渡された罪人　や　とが　おか  
は

したものへと認められた人ではあるが、決して盜をするために、人を殺し火を放つたへというような、獰悪な人物が多数を占めていたわけからではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、いわゆる心得違ひのために、想わぬ科を犯した人であつた。ありふれた例へをあげて見れば、当時相対死といつた情死を謀つて、相手女を殺して、自分だけでも生き残つた男へというような類である。

そういう罪人へをのせて、入相の鐘へで鳴る頃に漕ぎ出された高瀬舟へは、黒ずんだ京都の町の家々を両岸に見つつ、東へ走つて、加茂川を横ぎつて下るのにあつた。

この舟の中へと、罪人とその親類の者へとは夜どおし身の上を語り合う。いつもいつも悔やんでへもかえらぬ繰言で